

今回から、阿井の地域づくり等に貢献した人々を紹介します。

板屋清右衛門という人

上阿井町に米原というところがある。今は国道沿いに家屋が並ぶ小さな集落である。昔は上阿井のどん詰まりであり格別の用事がない旅人は米原に立ち入ることはなかった。雲備の境を越すには米原の鎮守神社前より宮ヶ峠を越して長谷にぬける細道が唯一の道であった。当時備後の国に通じる本街道は三軒家より長谷に登り、楨原か真地に下って、木地谷から王貫峠を越すか、呑谷を通って毛無山麓を横切って和南原に通じる道路があっただけだった。この米原は古くは広原と呼ばれていたようで、いつからか明確でないが、米原と呼ばれるようになったという。古老の伝えによるところでは、広原は土地が肥沃で植え付けたいつの年でもよく育ち、上阿井の米所であるというので米原と名付けられたとも言われている。

又一説には、昔いつかの大豊作に広原で一粒の太さが雛の卵大の米が実ったというので米原と改称されたとも伝えられている。この年はまれに見る大豊作で、土地の貧しい百姓はこの大収穫に大喜びだったという。

この米原の発展には一人の人物が大きくかかわったといわれている。板屋清右衛門という人である。彼は今から三三〇年ほど前、備後と南原から移住してきた。この板屋清右衛門の先代は名越尾張守であった、慶長五年の関が原の合戦の際に豊臣方に加わって奮戦したとされている。その後徳川の天下となり、尾張守の一族は僻地に身を隠して世を渡らなければならず、孫に当たる名越助之兵衛も又備後国高野

山部山城主（池さんに関係した水越合戦で記述）に救われて、慶長五年の秋に和南原にきた。そして部山城防衛の一役に任ぜられ和南原の城谷というところ（旧和南原小学校の南側）の五十メートル四方にも及ぶ堀を巡らした居所を構え、部山城に変事を知らせる為の狼煙を上げる役を申しつかつていたという。

そうした先祖を持つ清右衛門は、米原一帯の広い土地の開発に乗り出し、阿井川から水を引き入れる水路をつくり、肥沃な田んぼを作り上げた。移住後屋号を上米原と呼んで土地の顔役として地域づくりの中核的な役割を担う。開発した米原田んぼのほとんどを領有し、米どころ米原を今のようにした業績は偉大と言うほかはない。また、清右衛門は鉄師頭取として活躍していた櫻井家の孫にあたり、櫻井家の鉦製鉄ともかわりながら地域開発を成し遂げた人物である。

*米原には昭和二十二年（一九四七）にバスの停留所ができ、昭和二十八年（一九五三）に川西水路がこの地を通り、豊かな農業生産を支えている。

*雲備街道は、米原奥に阿井川沿いに道がつくられ、大きく迂回はしたが、長谷越しよりも近いものができ上がった。現在では楨原隧道によって危険な崖路を避け直線的な街道となった。近年の松江尾道自動車道の開通によって広島方面からの車が頻繁に往来する地域環境にかわっている。

